

痕跡を顧みて未来を改める

桑畑洋一郎（山口大学人文学部）

タイトルだけ見ると説教もしくは教訓めいたエッセイかと思われるかもしれないが、そういうことではない。

さて、以下の写真を見ていただきたい。



図1：靴（2026年3月25日筆者撮影。筆者の私物）

のっけから小汚い靴をお見せして恐縮だが、これは筆者がスケートボードの際に履いている靴（の左足側）である。

そもそも「スケートボードの際に履いている靴」というものがあり、なぜそれがこんなに小汚くなるのかということについて、説明が必要であろう。またさらにそもそも、筆者がスケートボードをしているということについても若干の説明が必要かもしれない。

先に筆者とスケートボードの関係について述べたい。筆者は、高校2年生ごろにスケートボードを始め、その後進学や就職、転職に伴ってスケートボードをやめたり再開したりしてきた。近年では、コロナ禍において運動不足を解消するため、2020年から再開し

ている。山口市内だと維新百年記念公園で滑っているので、目撃された方もいるかもしれない。なお念のため述べておくが、少なくとも現時点では維新百年記念公園の中でも、筆者がスケートボードをしている区域（記念塔がある区域）は、管理している（一財）山口県施設管理財団が公式にスケートボードを黙認（「公式に黙認」とは形容矛盾的だが）しているもので、何かの規則に反しているわけではないことは、誤解のなきよう申し述べておきたい（注1）。

その上で「スケートボードの際に履いている靴」である。スケートボードは、板の表面（靴と接地する面）に紙やすりを貼るのが一般的である。紙やすりを貼ることで摩擦係数が上がり、靴が引っかかりやすくなる。そうすることで、ジャンプすることや板を回転することが容易になる。一方で、紙やすりである以上、何かするたびに靴は磨り減る。こうして、摩耗の結果として、図1で示した小汚い靴が仕上がるというわけである。また、普段履きする靴をスケートボードに使うと、図1のような小汚いものと化してしまうため、スケートボードをそれなりに愛好している者（スケートボーダー）は、普段履きする靴とスケートボード用の靴とを使い分けるのが一般的である（気にせず普段履きする者もいる）。

ということで、スケートボードをやっていると、使用する靴がどんどん磨り減っていく。特に何もしなければ1か月程度で穴が空く。

また、スケートボードには適した靴とそうでない靴とがある。靴の向き不向きについてはここで説明することはしないが、適した靴のことをスケートシューズと言う。スケートシューズは、通常の靴以上に消耗品であるくせに、非常に高い。スケートボードというスポーツをする際に使う専用の靴をメーカー各社が開発しているため仕方ないのだが、図1で示したものと同一メーカーのスケートシューズである「NB Numeric」（ニューバランス）は、2026年3月現在、最も安いもので9,790円、最も高いもので22,000円である（<https://shop.newbalance.jp/lp-skateboarding.html>）。

もちろんアウトレット品やセール品等やや安価になるものもあるし、上手いスケートボーダーであればスケートボード用品店やメーカーがスポンサーにつき、靴等を店やメーカーから提供してもらえることもある。しかしスケートボーダー皆がスポンサーを受けられるわけは当然ないし、安価になると言っても知れている。1か月ごとに10,000円前後の靴を交換するのは、その辺の人間には負担が大きい。筆者も同様である。

そこでスケートボーダーの多くは、摩耗してきた靴を自分で補修する。スケートシューズ専用というわけではないが、メーカー側が公式にスケートシューズの補修にも向いて

いると謳っている補修剤 (<https://www.shoegoo.co.jp/>) などがあり、そうしたものを使って修理を行うわけである。ちなみにこの補修剤は1つ2,000円程度であり、数十回は補修作業を行える程度の内容量があるので、圧倒的にコストが削減できる。図1でつま先近くからくるぶし付近までがやや光って見えるのは、この補修剤を塗って補修を行ったためである。つま先付近が磨り減っていて白くなっているのは、図1からも見て取れよう。仮に補修剤を塗らずにそのままスケートボードを続けると、穴が空いてつま先が見える状態になってしまうため、補修剤を塗って補修・補強を行うわけである。

ということで、スケートシューズをそう簡単に買い換えられないスケートボーダーは、補修剤等を使い、補修作業を行うのが一般的なこととなる。なお、補修作業の様子を撮影した動画は、YouTube等にも多くアップロードされており、補修作業に不慣れな人間でも動画を見ながら作業することが可能になる。そうした、ハウトゥ的な動画は多数あり、例えばアマチュアのスケートボーダーである yewckyTV (チャンネル名) 氏が投稿した、「スケボー初心者講座：初めての SHOE GOO！スケシュー補修&補強の仕方！！【NEW スケシュー：VANS KYLE WALKER PRO】」(<https://www.youtube.com/watch?v=o12BetB5gWQ>) という動画がある。なお、「スケシュー」というのはスケートシューズの略称であり、この動画の中では実際に先に見た補修剤（「SHOE GOO」）を用いた補修と補強のハウトゥが行われている。

ようやくここから主題に入るのであるが、この動画の中で、本稿の主題に関連して興味深い発言がいくつかある。この動画の6分10秒時点付近から、投稿者は次のような発言をしている。

そうしたら次は、ソールの補強ってことで、塗っていきたいと思います。まあこんな感じで（靴のつま先付近をカメラに近づけながら）、明らかに分かると思います。ここが擦れている部分で、まあ白くなっている、と。この辺が（ややくるぶし側をなぞりながら）、まあ黒ずんでるんですけど（笑）ユーズドなんで、削れていない部分ということで、まあ分かりやすいと思うんですけど。（<https://www.youtube.com/watch?v=o12BetB5gWQ> より。文字化は筆者による）

「ソール」とは、靴底部分の総称である。さてここで注目したいのは「ここが擦れている部分」という発言である。要するに、スケートボーダーは、補修をする段階においても（その段階だけではないが）、自分のスケートシューズの磨り減り方を認識し、補修が

必要な程度に磨り減っている箇所に対して補修を行うということが、この発言から示されている。先にも少し言及したが、図1に掲載した靴もまさに、すり減って白くなっている部分を中心に、補修を行っているわけである。

続いてもう1つ、この動画において先と同様の発言がなされている箇所に注目してみたい。7分52秒時点付近からの投稿者の発言である。

あとはまあ、ヒール側は、僕あんまりヒールフリップしないんで（笑）、今回は塗らないんですけど、まあ削れている部分塗るだけっていう感じでやればきれいに塗れるかなという風に思います。（<https://www.youtube.com/watch?v=o12BetB5gWQ> より。文字化は筆者による）

なお、この発言がなされた際、「僕あんまりヒールフリップしないんで」という実際の発言に重ねて、「ヒールフリップしないというか出来ない（笑）」というキャプションも入れられている。

ここで語られている「ヒール」とは踵のことであり、「ヒールフリップ」とは、踵部分外側（より正確には外側のくるぶし近辺）を板に擦らせることで板を回転させる、スケートボードの技のことである。投稿者はこの技を「しない」と発言し、したがって自身の靴は踵部分が削れておらず、補修は不要であると述べているのがこの箇所である。その後投稿する際に、発言への自虐的な注釈として「しないというか出来ない（笑）」とキャプションを入れたというわけである。

先の6分10秒時点付近からの発言の趣旨を確認すると、スケートボーダーは、補修をする段階において自身の靴の磨り減り方を改めて認識する、ということであった。さらに今回の7分52秒時点付近からの発言をこれに合わせると、補修時に認識された自身の靴の磨り減り方が、さらに多くのことをスケートボーダーに認識させていることがうかがえる。それはすなわち、スケートボーダーは、自身の靴の摩耗の傾向を通して、ある技ができる／できないといった自身のスケートボードの技量や、あるいは自身の技の傾向やスタイルを認識しているということである。言うならば、靴の磨り減り方が、スケートボードをしているまさにその時には認識できない、自身の技量や傾向を、目の当たりにさせてくれるというわけである。

翻って図1で示した筆者の小汚い靴である。筆者は、ここまでに言及した動画の投稿者が「しないというかできない（笑）」と言っていたヒールフリップという技が、一応でき

はする。ただ、できはするのだが、安定しない。本来必要な 360 度回転せず、180 度程度（つまり裏返し）で終わってしまうことが非常に多い。不完全回転になってしまう理由としては、おそらく踵部分での擦りが甘いのだろう。ということは、裏返しで終わってしまうという結果と、既に持っているスケートボードについての知識を照らし合わせることで類推はできる。

ただこれはあくまでも類推である。甘いと思われる擦りが、実際にどうなっていて、理想形からどのようにどの程度程遠いのかといったことを検討するには、別の材料が必要になる。

そこで用いられるのが、靴である。つまり、靴の摩耗を見て、ヒールフリップも含めた技をする際に、靴のどの箇所をどの程度板に擦らせているか判断できる。筆者の場合は、「N」のロゴ部分よりやや踵側のステッチがほつれているので、その辺りを擦らせているのだと思われる。また、理想の磨り減り方は、他のヒールフリップを得意とするスケートボーダーの靴を見れば確認できる。「上手い人はここで擦っているんだ」「うまい擦り方をすると、このように摩耗するんだ」と理解できるのである。こうして、靴に残った痕跡を顧みながら、自身のスケートボードの技量を判断することが可能となる。ちなみに、筆者のヒールフリップは、摩耗している箇所は問題ないのだが、摩耗の程度が軽いので、やはり擦りが甘いことが靴から見えてくる。もっと摩耗が激しくなれば、理想形に近づいてきていると自覚できるようになるというわけである。

また、やや異なる仕方で、靴が指し示してくれるものもある。同じく筆者の小汚い靴の右足側を撮影したものが図 2 である。



図2：靴（2026年3月25日筆者撮影。筆者の私物）

図1は左足側であったのに対し、この図2は右足側である。見て分かる通り、左右どちらも小汚いが、補修が入っているのは左足の靴だけである。また当然、右足側は、つま先も含めてほとんどどこも摩耗していない。これは筆者が、右足を板の踏切に使い左足を板に擦らせる立ち方（「レギュラースタンス」と言う）を取っているからである。また、左足踏切の立ち方（「グーフィースタンス」と言う）に入れ替える（「スイッチスタンス」と言う）立ち方を、全くと言っていいほどしていないことを示している。右足を板に擦らせることをほとんどしていないため、補修が必要な程には傷んでいないわけである。

スケートボーダーは、こうしたことを通して、今度は技量ではなく、自身の技の傾向やスタイルを認識することになる。つまりは、筆者であれば「グーフィースタンスを全くしていないな」との認識を持つことになる（注2）。また、先に触れた動画の投稿者が、撮影時は「僕あんまヒールフリップしない」と当初発言していたことも同様である。ある技をしない傾向にある／ある技ばかりする傾向にあるといった、自身の技の傾向やスタイルもまた、靴の磨り減り方を通して認識させられる（もちろん技量の程度を同時に認識させられることもあるが）。

ここでタイトルに戻る。スケートボーダーは、靴の磨り減り方という痕跡を目にし、普段の自身のスケートボードの技量やスタイルを認識させられる。またさらに、そう

した認識に基づいて、「もっとこっちが擦れるように足を動かさないといけないのではないか」「自分はこの技をしないがもっとやった方がいいのではないか」といった形で、痕跡から得た認識を未来に返していく。「痕跡を顧みて未来を改める」という本稿のタイトルは、こういう趣旨である。

また実は、こうした行為は、別にスケートボーダーに限らず、誰しものが日常的に行っているものである。スポーツをしている人間であれば、スポーツ用品を見て、自身の身体の動かし方を認識することはしばしばあると思われる。もっと卑近なところでも、例えば筆者の家のテレビのリモコンは、あるボタンの印字が磨り減って見えなくなっている。そうした痕跡を見ることで、自身の視聴傾向とその蓄積度合いを認識させられることとなる。ボールペンの特定の色だけ減りが早いといったことは、ペンでものを書いたことがある人間であれば誰でも経験したことがあるだろう。

このように、身の周りで我々が用いているものに残った痕跡は、それまでの我々の動作や生活を認識させてくれるものであるし、そうした認識を基に未来を改めようとするとは、日常にあふれている。このように、日常的に我々の周辺にある痕跡に目を向け、そこから何かを読み取ろうとすること、このことは、実は緻密な観察とそれに基づいた知識の動員とそこからの推測によって成り立っており、さらに場合によってはそこから未来を変えようと動くこともあるという実践でもある。痕跡に目を向けることは実は極めて知的な営為なのである。

注1 例えば同財団の公式ウェブサイトにある「利用者アンケート調査結果」（2024年10月～11月に調査が実施され、結果が2025年4月掲載されたもの。

<https://www.ishin100.com/main/questionnaire/>）の「アンケート結果（要望・意見）」には、「スケートボードを禁止した方がよい」という利用者の声に対して「現在、一部区画のみ利用を認めていますが、他の来園者の迷惑とならないよう、今後もマナーを守っていただくようお願いします。」と管理者側が回答している（2026年3月現在の掲載資料では5ページに記載）。そもそもスケートボードに関する利用者の要望は1件のみでごく少ないし、管理者と雑談してきた経験則からすると、この方針は今後も変わらないと思われる。なお、わざわざこんなことを断り書きせずとも読者からの誤解は生じないと思うし、こういった断り書きをすること自体も忸怩たるところはあるが、念のためである。

注2 あらゆるスケートボーダーに得意なスタンスがあるのだが、とは言え複数のスタンスを近いレベルで使いこなせる方が、技量が高いスケートボーダーと見なされる。したが

って、特定のスタンスだけしかできないスケートボーダーは、「まだまだ」と位置づけられる。